

法に随順する心について

十二月十七日午前

「先生、ここにです。」

岡山市でのことです。谷本一君に案内せられて、日下かず子さんの病氣見舞いに来たのでありました。病室に通されました。

「先生どうか、岡山の講座の時には、かず子さんのところに行つてあげて下さい。先日、義彦がお見舞いに寄つた時、是非もう一度先生にお会いして死にたいと言つていたそうですから。もうあまり長くはないらしいのです。どうか十二月の十六日まで生きていてくれればいいが……間にあえばいいですが……。」

それは石井の母の言葉でした。間にあつたのです。かず子さんは私の顔を見るなり、顔を両手で覆うて泣いてしまいました。かず子さんはまだ女子師範にいた頃、多くの学友を連れて、み法を聞きに来ていました。それが結婚後、音信も絶えていたが、二十九歳になつた今では二人の嬢の母になり、夫君が大阪のさる御役所に勤めておられるので、大阪に住んでいられたが、昨年から胃癌を病んで、今は里に帰つて養生しているのである。かず子さんの叔父さんには、岡山医大の助教授の日下博士もいられるのに、手術もせられずにこうしているところを見ると、手のつけようがないので、自然死を待たしてあるようであります。

かず子さんは床の上起きて坐りました。その昔の丸々と太つた姿はあとかたもなく痩せ細つています。み法のお話を始めました。かず子さんは、待ちに待つていたこととて、一言一句も聞きもらさじと聞き耳をそばだてます。合掌して泣きながらお念仏申しています。歓喜そのものの相がだんだん顕われて来ました。そのかみの念仏の意に帰つて、涙の中に笑顔さえ浮んで来ました。三人のいる部屋の中には、厳粛なそして温い、シーンとした空気がみなぎりました。一時間もたつたところ、今はもう言うべきことも言いつくしました。

「かず子さん。あなたの体は、万人の留学博士を動員するとも、人間の手の届かぬ世界にいます。しかも、その人間のあらゆる手段の届かぬ世界こそ、み親の本願のみの生きて下さる世界であります。しかし、あなただけが、人間の手の届かぬ世界にいますのではない。今、達者でいるはずの私、その私の心というものを内観すれば、その心のどん底には、地上の一切のものとの手のとどかない、難治の重患をかかえているのです。その下品下生、極悪最下の逆悪の根性が、如来の光明によつて円融無碍に救い上げられるのでありますから、我を真実に知る智慧を恵まれたものは、全我を大悲の光懐に托しきるのであります。」

それがお話の最初であつたが、今や、彼女は安らかに全我を光明撰取のうちに見出したようであります。最後に私は言いました。

「かず子さん。あなたは どうします。今、もし、そのお念仏を返してくれたら、即座に病氣は全快する。しかし私とも、石井の母とも、そして多くの同胞とも、聖人とも、如来ともお別れです。もしお念仏を返してくれないなら、貴女は死んでゆくとするば、どちらを取りますか?」

するとかず子さんは、

「先生、私はお念仏申してみ親の浄土にゆかして頂きます。」と。

それから、今日一日を錦の上を歩む気で生きさせて頂くことを告げ、別れを泣く彼女に「別れ路をさのみ嘆くな法の友、またあふ国のありとおもへば」の歌あるを告げ、和讃を一首「超世の悲願聞きしより」を合唱し、別れを告げて出て来ました。悲しい、しかし、有難くも尊いもので胸は一ぱいでした。

十二月二十二日夕方、

私は、心の底に鉛を呑んだような辛い心で、足に鎖でもついているような重い足を引きづって本部に帰って来ました。それは、私が明日はまた旅に出なければならぬので、病気の床に真暗な心で寝ていられる、ある奥さんにお話しに出かけたのであつた。立派なお別荘、金に飽かした調度品、物に何不足のないこの御一家にも、哀れこの世の悲しさがおしよせて、二階には同じ御病気で、御主人と嬢さんが寝ていられます。このお二人は明るい心でいられるし、奥さんのみが、少しは私のお話を聞いて下さっていたし、お話の対象は、奥さんになり易いのです。

奥さんの心は暗い。体の病の程度よりも、心の方がもつと重い。さつきも主治医が「何とか心が変わつて来なければ」と心配していられた。無理もない、初めは二階の二人の病がよくないとて行末を案じ、この頃はまた二人の方はややよいというので、こんどは自分の快くならないことが心配の種で、毎夜ぐ／＼が眠られない。睡眠がとれないから食事がすすまない。そこでそれが病を悪くする因となるのです。

「先生、どうして私の心は聞いてくれないのでしょうか。……どうして有難くならないのでしょうか……どうして御恩を知ってくれないのでしょうか。」

自分でも、心が誰の言うこともうけつけてくれないことを困つていられる。いく度訪れても、人間的な心では泣くほど感謝されても、み法そのものは受け取れないのです。そしてそれが自分を暗くするのみならず、家中の人を暗くしているのです。恐らく世の迷信はこうしたところにつけこんで来るのであろう。正しい法のみを受け取れることを求めて、いわゆる御利益を説かない宗教を聞き得ることの至難をほとほと思うことである。「難中之難 無過此難」との『大経』の御文を思い出すことでもあります。自分の幸福を亡ぼされまいとする心が、強く／＼硬化して、それが中軸となつて生活のすべてが運転されている。一切の生活の相が、この何ものでも動かない我欲の心棒を中心として動いている。養生するのはもちろんのこと、宗教を求めるのも、修養を志ぎすのも、すべてがこの中軸の強化のためである場合、そしてそれがどうしても微動だにしてくれない場合、人は、順境に驕り、逆境には真暗になるより外はないこととあります。

正法は風のようなものだ、この頃つくづく思うこととあります。受け取るまいとするもの、無視するもの、あるいはどうしても受け取らぬ機においては、正法ほど弱いものはない。何を聞いても、話になつてしまえば、岩に風が当るようなものであります。しかし、正法の一言一句が絶対の威力を持つて受け取れる心にあつては、正法

ほど強いものはない。それは、無風の時には微動だにしない稲田が、風が吹けば、そのままに波を打ってゆれ動くがごとくであります。

ああ、正法を受け流してびくともせぬこと巖いわの如き自力我執の心と、一言一句の言に驚天動地の威力を感じずる本願他力大信の心と、この二つ心の差異が、やがて、絶対の闇か、常恒不滅の光かという差異となり、永遠の悟りか、永劫の迷路かの差となり、つきせぬ歓喜か、無限の悲痛かの差となりてあらわれて来て、一つは本質的に人格を成立せしめ、一つはついに表面的に一生をゴマ化して、貪欲の為に空費せしめて、真人格の成就することなく、したがって、一つは普遍の道義に無我に随順して、道に内在する真の喜びに生死すら超えて、悟りの彼岸に渡ることを得、一は随縁の雑善に自他を偽って、何の意義もつかまらずに、この国土を去るのであります。

私は、初めに病床にある人をあげましたが、今日、達者で世の中に働いている人の中においても、この二種の人があるのであります。我執我欲の心棒を中心として諸有輪に沈迷する人と、正法によつてこの心棒を断ぜられて、如来廻向の無我の信心を中心として不退転に光輪に生かされている人とであります。

広島県と岡山県との境のある村の医師がこう言われたことがあります。

「この村は東と西と中との三部落から出来ていて、西の字は全部浄土真宗であり、東の字は全く余宗で、中部はまぜまぜです。ところが、医者立場から見ますと、西の字は病人が出来るとすぐ診察を求めて来て医者言う通りにします。したがって全快もはやい。これに反して東の字は病人が出来ると、まずさまざまな祈祷やまじないをやつて、悪くなつてからやつて来る。そしてもし快くなれば、神様の御利益にしてしまふし、悪くなれば医者の罪にします。随つて薬価もなかなかくれない。中央の字は、東と西との中間です。」

とのことでありました。
法に随順する心の尊さは何れの方向に向かつても現われるようであります。ほんとうの東洋の相、ほんとうの日本の相は、正法に随順する素直さにあるようであります。仏教とは正しく、無我に正法に随順する正信の世界であります。

日本の国土は、おそれ多くも、上御一人の御仁慈の御徳の風の流れたもうてある国であります。この至尊の御陵威の御徳風になびき奉る徳の草が、民草であります。でありますから、この至尊の風に随順し奉ることこそ唯一絶対の臣道であります。

此の絶対随順の心を成就するもの、仏教であります。竹を人の手で一時頭を下げさせたような一時的なことではなく、表面的ではなく、衷心から真に恭敬随順の無我の心を成就するのが親鸞聖人の他力本願の世界であります。

臣道実践の新体制も、また、この正法に随順する心の上のみ真に成就せられると信ずるものであります。世の智者よ、西洋流の思想にかかづらい、あるいは素朴偏見の日本主義に禍されて、仏教の真意を知らずしてこれを廃毀することなかれと、お願いせずにはいられませぬ。仏教者は低調なる現世祈祷の外道を仏教内から排除しなくてはならない。